

ナムジャウ

1. 事業実施の目的

博士論文を作成のためのデータ収集

2. 実施場所

中国新疆

3. 実施期日

平成 29 年 5 月 24 日（水曜日）から 6 月 14 日（水曜日）

4. 成果報告

●事業の概要

本調査は申請者の博士後期課程学位論文を作成するための資料収集であり、調査の段階としては補足調査にあたる。これまでの予備調査・本調査では、新疆オイラド・モンゴル社会における宗教指導者のシャリワン・ゲゲン 14 世と彼の座所であるホボクサイルのオワート寺を対象に考察してきた。それによって、第一に 1980 年代以降、中国の民族政策の緩和に伴って見られた各民族の文化復興や民族アイデンティティの高揚などの潮流のなか、シャリワン・ゲゲン 14 世は単なる宗教指導者から新疆オイラド・モンゴルの民族指導者へと移行してきたこと、第二にシャリワン・ゲゲンはチベット仏教界の伝統に沿って、寺院に活仏として崇拝されていると同時に、各寺院の社会的、経済的基盤が再構築される過程に欠かせない要素として新たな意味で位置づけられていること、第三には、1980 年代以降の中国民族政策の緩和によって仏教寺院が再建される過程及び今日のオワート寺における宗教実践の実態などを解明した。今回はこれまでの予備調査・本調査を補足する目的で、オワート寺において実施し、主に当寺院における重要な法要の一つである死者慰霊祭に関して考察を深めた。

現地の人びとは、死者慰霊の際に墓へ行かず、寺院において死者慰霊のための参拝を行ってきた。オワート寺の場合をみると、死者慰霊祭を含む重要な法要の際、人びとは僧侶に感謝の気持ちと自分自身に公德を積むといった動機で、法要一日分の食事を僧侶たちに提供する習慣がある。この習慣によって、各法要日の食事を提供する家が指定されている。今回は死者慰霊祭に食事を提供する各家の概要、法要参加の起源、法要に提供する食事の種類、各家の現在の生活状況などについて基本データを収集した。

こうしたオワート寺における死者慰霊祭において、食事を提供する各家の詳細を含む法要の全貌から、以下のことが明らかになった。1)、各法要日に食事を提供する人びとのなかで、本家の殆どは牧畜の暮らしを営んでいる。2)、1949 年に中華人民共和国が建国された後、ホボクサイルにおいては人民公社・牧場の集団化体制や鎮・郷・村の新体制の導入と変容につれて人びとの暮す土地と生活基盤が変わり、オワート寺を巡礼する旧「王の旗」旗民はホボクサイルの各鎮・郷・牧場に広く分散している。3)、旧「王の旗」旗民がホボクサイル各地に分散されたにもかか

ならず、死者慰霊祭のときは祖先から代々継承してきた習慣として各家の行事を維持している。また、各家の行事の起源については不明であることが多いが、それぞれ独自の動機やそれにつながる物語を持っている。4)、各法要日における各家の行事を通して、旗・佐・十戸というかつての「盟旗制度」が再興している。

こうして宗教復興や復興後の実践に応じて再興されているかつての「盟旗制度」を、清朝期の元の体制と比較すると、政府が導入したものではなく、民間のレベルで再活性化されたものである。ただし、オワート寺を含むホボクサイルの各寺院の運営と僧侶の日常生活を支える社会的経済的な基盤になっていることは明らかである。

●本事業の実施によって得られた成果

本調査によって得られてデータをまとめて「新疆オイラド・モンゴルにおける宗教復興及び復興後の実践について——ホボクサイルのオワート寺を中心に」という題目で論文を執筆し、学会誌に投稿する予定である。

●本事業について

貴重な調査機会を頂きありがとうございます。